

お彼岸について・・・。

「暑さ寒さも彼岸まで・・・。」といわれるようにお彼岸は季節のくぎりであります。

彼岸（ひがん）とは雑節の一つで、春分・秋分を中日とし、前後各3日を合わせた7日間のことで

す。また、この期間に行われる仏事（彼岸会）で最初の日を「彼岸の入り」、最後の日を「はしりくち」という。元々は煩惱を脱した悟りの境地のことで、煩惱や迷いに満ちたこの世をこちら側の岸「此岸」（しがん）と言うのに対して、向う側の岸「彼岸」といいます。彼岸会は『到彼岸』の意味とされ、すなわち現在、我々が住んでいるこの迷妄の世界は此岸（しがん）であり、仏菩薩の悟りの世界である彼岸に渡ることを目的とするのが彼岸会の仏教的な意味です。『到彼岸』は原語のサンスクリット語（梵語）では、パーラミターと言います。「彼岸」という言葉は、本来、春彼岸をさし、秋の彼岸は「秋彼岸」と区別しているのです。

・由来

彼岸の仏事は浄土思想に由来します。

春分・秋分の日が、太陽が真東から上がって真西に沈むことから、浄土思想で信じられている極楽浄土（阿弥陀如来が治める浄土）は、西方浄土という西方の遙か彼方にあると考えられています。春分と秋分は、太陽が真東から昇り、真西に沈むので、西方に沈む太陽を礼拝し、遙か彼方の極楽浄土に思いをはせたのが彼岸の始まりです。元々は中国から伝わったもので、心に極楽浄土を思い描き浄土に生まれ変われることを願ったものですが日本に伝来後いつの間にか法要を嘗み祖先を祀る行事へと変化しました。

日本で初めて彼岸会が行われたのが、日本後記によれば大同元年（延暦二十五年・西暦806年2月に崇道天皇（早良親王）を慰めるために諸国分寺にて「七日金剛般若経を読まわしむ」というのが「彼岸会」の初出だとの記述されています。春分・秋分の日に行われる彼岸会は、仏教的行事となる以前は日本人の農耕生活に深く根付いた行事であったと思われます。彼岸の7日間の間に『日の伴』とか『日迎え日送り』をする行事は近畿地方一帯にあったとの記述がみえます。これは、朝の日の出る東の方のお宮やお寺にお参りして日中は南の方のお宮やお寺に参り、農耕の安全と農作を祈り、これを節目として祖先の霊を祀るのです。きわめて原始的な太陽崇拜ともいえますが、彼岸会が太陽と農耕と切り離せない関係にあると思われます。彼岸には太陽が真西に沈み、その方向に向かって念仏すればかならず極楽に往生ができるとされています。彼岸会は春分の日を中日として前後3日間、計7日間にわたって営まれる法要ですが、仏教行事でありながらインドや中国には同じような行事が見当たりません。

彼岸会は日本独特の祖霊崇拜と仏教法要であるといえます。

その始まりははっきりしたことが分からず聖徳太子が企画構想したものであるという説もあります。

その理由の一つは、「彼岸」という言葉を「あの世」と解釈して、亡くなられた人々を供養するという意味から、お墓参りをするようになったと思われる。

・お彼岸の意味・・・

彼岸という言葉は、古代インド語のパーラミター（波羅蜜多）が語源で、意味は「彼の岸へ至る」ということです。煩惱や迷いに満ちたこの世を「此岸」というのに対し、悟りの世界・仏の世界を「彼岸」といいます。

悟りの世界に至るために、仏教には六波羅蜜の教えというのがあります。

此岸から彼岸へ、すなわち悟りの世界へと入るための六波羅密とは・・・。

1布施 財施（財を施すこと）・法施（真理を教えること）・無畏怖（恐怖を取り除き安心を与えること）の三種

2持戒 戒律を守ること

3忍辱 にんにく・苦しさに絶えること

4精進 常に仏道を修するための努力をすること

5禪定 心を安定させること

6智慧 真理を見抜く力を身につけること

以上六つの徳目のことです。

彼岸に行くことを願って、行いを慎むことがお彼岸法要の本来の意味です。

・お彼岸の期間

お彼岸は、春3月と秋9月の年2回あります。

期間は、春分の日と秋分の日を中日（ちゅうにち）として前後3日間の7日間です。

そして初日を「彼岸の入り」といい、最終日を「彼岸の明け」といいます。

・お彼岸の供養

お彼岸にはできるだけ家族そろってお墓参りをします。お墓参りに特別な作法はありません。

墓石をきれいに洗い、周りも掃除して花や線香をお供えします。

手桶から水をすくい、墓石の上からかけて合掌礼拝します。

また、家庭では仏壇を掃除し、花や季節のもの、ぼたもち、おはぎ等をお供えし、ご先祖の供養をします。

・お彼岸のお寺の行事

お彼岸にはお寺で、「彼岸会」の法要が営まれます。

お墓参りの折にはお寺の彼岸会にも参加してご供養をお願いします。

忙しくて時間がない場合でも、本堂のご本尊へのお参りとご住職への挨拶は欠かさないようにしましょう。

・彼岸と墓参りの習慣

これまで書いてきたような様々な要因が混交し、江戸時代頃から彼岸に墓参りをすると行った風習が起こったと考えられています。

また、彼岸の時期は気候的にもよい時期であるため、墓参りにかこつけて野外への遊山をすると言った娯楽としての側面もあったと考えられます。

・供物

彼岸会の時には在家では仏壇を丁寧に掃除し、また墓参りするのが習慣であり団子をつくって供えることは日本中広く行われています。

日本で彼岸に供え物として作られる「ぼたもち」と「おはぎ」は同じもので、炊いた米を軽くついてまどめ、分厚く餡で包んだ10cm弱の菓子として作られるのが一般的です。

おはぎはお彼岸の時どこの和菓子屋の店頭にも並ぶものですが、春に作るものをボタ餅、秋につくるものをおはぎと呼ぶという説もあります。

これらの名は、彼岸の頃に咲く牡丹（春）と萩（秋）に由来する説がもっとも有力です。

・きな粉と胡麻

1271年（文永8年）9月12日、日蓮聖人が鎌倉の龍ノ口 現在の日蓮宗御霊蹟龍口寺の刑場へ引き立てられていったおり、急を聞いた棧敷の尼が、なにか最後のご供養をと考えたが、急であったため餡をつくる時間が無く、きな粉と胡麻をまぶして牡丹餅を作り日蓮聖人に献上したという。

その後、日蓮聖人は、難を免れ佐渡に流罪となった。

この故事にちなみ陰暦9月12日、日蓮宗では「御難の餅」という胡麻のぼたもちを作って供えています。

また「難除けぼたもち」「首つなぎぼたもち」などと呼ばれているようです。

・お彼岸と祝日

「国民祝日に関する法律」によりますと、「春分の日」は「自然をたたえ、生物をいつくしむ」、「秋分の日」は「先祖をうやまい、亡くなった人をしのぶ」と書かれています。

日本人は古来より、「遠くのご先祖様を神様と呼び、近いご先祖様を仏様と呼ぶ。」といった、まさに祖先崇拜の精神そのものであります。

・関連事項

お彼岸疑問「春は牡丹・・・秋は萩・・・」彼岸は春分の日と秋分の日の前3日と後3日の間の7日間（春・秋分も含み）。暦の上では雑節の中に入ります（春分日・秋分日はこちらで計算できます）。春分（秋分）の3日前の日を「彼岸の入り」と言い、3日後を「彼岸の明け」と言います。春分・秋分は、その中間に位置しますので、「彼岸の中日」と呼ばれます。この彼岸は、仏教行事であるのですが、日本独特の行事です。ちなみに、「彼岸」とだけ言った場合、これは春の彼岸を指します。秋の彼岸は「秋彼岸」または「後の彼岸」と言うのが本当です。昔から、彼岸には先祖の霊を敬い墓参りする風習があります。また地方によって若干の違いはありますが、ぼた餅、おはぎ、団子、海苔巻き、いなり寿司などを仏壇に供え、家族でもこれを食すと言った風習も残っています。ぼた餅は「牡丹餅」、おはぎは「御萩」。昔、母に牡丹餅は牡丹の花の様に大きめに作り、御萩は萩の花の様に小振りに作るの話を聞いたこともあります。さらに花のイメージとして、ぼた餅はこしあん、おはぎは粒あんで作るのだそうです。宮中でお重に入れられ「はぎもち」と言われていたそうです。そこで女官の人達の女房言葉で「おはぎ」になりました。牡丹餅も女房言葉官中言葉で「おぼた」といったとも言ったらしいので、親しんだものの身分の違いと言うよりは、時期とまぶした餡の状態の違いでの呼び名の違いのような気がします。昔の彼岸の日付

参考文献：「暦と日本人」（内田正男氏著）

現在は、春分・秋分の日を中日として前後3日の計7日間が彼岸の期間ですが、時代によってこの辺には違いがあります。

・五紀暦・大衍暦（～861年）が使用されていた時代、現在のように定着した行事ではない「雑節」であったので、暦には記載されていません。

・宣明暦・貞享暦（862～1754年）日本の中世時代で宣明暦の暦注における彼岸は、春分・秋分の日から数えて3日目（と言うことは2日後）が彼岸の入りとなりました。蜻蛉日記（975年）・源氏物語（1010年頃）などにも「彼岸の入り」や「彼岸のはて」の記述が見えるので、そのころには一般的な行事になっていたようです。宝暦暦・寛政暦（1755～1843年）「彼岸は昼夜等分にして、天地の気ひとしき時なり。前暦の注する所、これに違入り」彼岸はあくまでも仏教から出た雑節の考えであったのです。本来の暦学とは何の関係もないものです。將軍の意向で仕方なく改暦した暦が宝暦暦なのです。一方、天保暦から、春分日・秋分日を中日としてその前3日・後3日の計7日間を彼岸と呼ぶようになりました。現在の彼岸の期間はこの方式で決められています。彼岸が暦に載るようになった理由が「江戸の歳事風俗史」に「國史大事典」の引用があります。「昔（彼岸会）の談義説法は比叡山の坂本に限って行われていた。都鄙の人々はこの説法を聞きたいがために群れ集うのだが、その年の彼岸の日付がよくわからないので難儀するからと、比叡山からの要請があって、これを暦に載せるようになった。」

この時代の仏教や寺院は「生きた教え」だったようです。

春分（秋分）と彼岸の関係を見てみましょう。

春分の日・秋分の日とはどんな日か

1．太陽が真東から昇り、真西に沈む日

2．昼と夜の長さが同じ日

3．お休みの日（祝日）

実は、多かれ少なかれ、上記の3つの内容は全て、彼岸と関係があります。

1．太陽が真東から昇り、真西に沈む日

真西に沈む夕日が浄土への道を示します。

先ほどからたびたび登場する涅槃の世界を、「西方浄土」と呼ぶことがあるとあり、阿弥陀仏の極楽浄土（西）にあるとされています。そのため、真西に太陽が沈む春分の日、秋分の日が極楽浄土への道しるべとなると考えられたのです。この日沈む太陽が示す極楽浄土への道は「白道（びやくどう）」といい、仏の示してくれたこの白道を信じて進めば必ず極楽浄土に至ると言う信仰が生まれました。この信仰は、浄土思想が盛んになると軌を一にして広がって行き、現在に至っています。

2．昼と夜の長さが同じ日

仏教の説くところの「中道」の精神を昼夜を二分すると言う点で、春分の日・秋分の日があらわしていると考えたのです。

（春分・秋分の日の出から日の入りまでの時間を計算してみると、実際は同じになりません。この辺の事情は、日の出日の入りの時刻とはどう定義されているかという問題が関係します。日の出、日の入りの時刻とは？も併せて読んでいただけると多少は納得できると思います）

3．お休みの日（祝日）

春分、秋分は祝日。主旨はそれぞれ、「自然をたたえ、生物をいつくしむ」と「祖先をうやまい、

無くなった人々をしのぶ」と法令に書かれています。

特に秋分の日趣旨は、まさに現在の彼岸そのもの。

彼岸の中日を祝日にしたと言ってもよいでしょう。

ちなみに、戦前と同じ日が「春季皇霊祭」「秋季皇霊祭」という祭日で、これは皇室内の「もと仏式行事」が神事化し祭日になったものです。

農耕と彼岸

春分と秋分は、農耕と言う観点から眺めると、

春分：種苗の時期

秋分：収穫の時期

にあたり、作物を育てる太陽と自分たちを守る祖先神への信仰と言う土着の信仰が仏教伝来以前からあり、春分には豊穰を祈り、秋分には収穫に感謝して供え物をしたことが原型と考えられます。

仏教が伝来すると、春分・秋分がそれぞれ彼岸の中日にあたることもあり、仏教の習俗と古来の風習が混交して現在の姿になったと思われます（ちなみに、サンスクリット語の [bhukta 飯

]+[n ridu柔らかい]が「ぼた+もち」となって定着したのだと言われます 年中行事を「科学」する

・永田久氏著）。